

箱の中身が宙に浮いている？…透明フィルム枠で上下から商品を挟んで固定・保護する梱包箱『イースターパック』。使い捨てにされがちな段ボール箱や気泡性緩衝材の代わりに、何回も使えるリユース梱包箱を開発したのは、スターウェイ株式会社の竹本直文社長（54歳）です。

○写真 <http://www.minato-ala.net/mag/photo/c/140210/001.jpg>

『イースターパック』は圧縮した紙で作られており、段ボール箱より強度は約6倍、値段は約10倍ですが、約100回以上使い回せるので、コストは約3分の1と竹本社長は言います。顧客は主に大手の精密機器や部品を出荷するメーカー等のほか、パソコンやプリンターの修理品の輸送でも、緩衝材いらずで梱包が楽な箱として重宝がられています。空き箱は持ち運びしやすいよう、三つ折りに畳めるのも特長です。

竹本社長は、半導体メーカーに勤めていた時に、納品用のトレーが使い捨てでもったいないと感じ、起業のヒントを得ました。また自宅で通販を利用した際にも、段ボール箱と緩衝材がゴミとなり処分が面倒でした。緩衝材を再利用するには…と考える内に、箱の中で2枚の透明フィルムで挟み固定するアイデアが閃き、特許を申請、1999年に創業しました。

特許が認定されるのに10年かかりましたが、その間に『イースターパック』は、2006年エコプロダクツ大賞で経済産業大臣賞を受賞する等10以上の表彰を受け、2008年には洞爺湖サミット（主要国首脳会議）の配送システムにも採用され、沖縄サミットの時より廃棄段ボール箱が約7割減になるなど、高評価を積み重ねてきました。

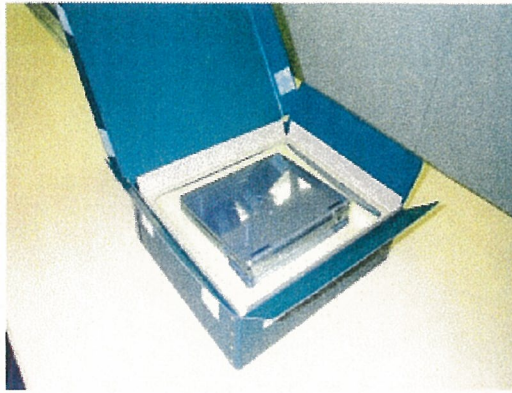
2008年には、中国政府の誘致政策を活用して、山東省に自社工場を作ったところ、尖閣問題等で日中関係が冷え込み、その影響等で撤退せざるを得なくなりました。一時は従業員200名を抱えましたが、再出発のため管理スタッフ中心の体制にし『イースターパック』の製造・販売ライセンスを大手子会社トッパン・フォームズ株式会社に販売、同製品は『紙コンテナ』の名で今年1月からサービスを開始しました。

「事業は大きくなる時が難しい。数億必要な時にどこも貸してくれない。一社では限界がある。どこにも負けない製品があるなら、大手に知財として販売するのを勧め。」と竹本社長。今後は、中小企業にも利用して欲しいと、合羽橋道具街の大手包装資材店で、初めての『イースターパック』店頭売りに挑戦中です。竹本社長は「梱包箱を使い回す“リバース物流”がもっと広まって欲しい」と意欲に燃えています。

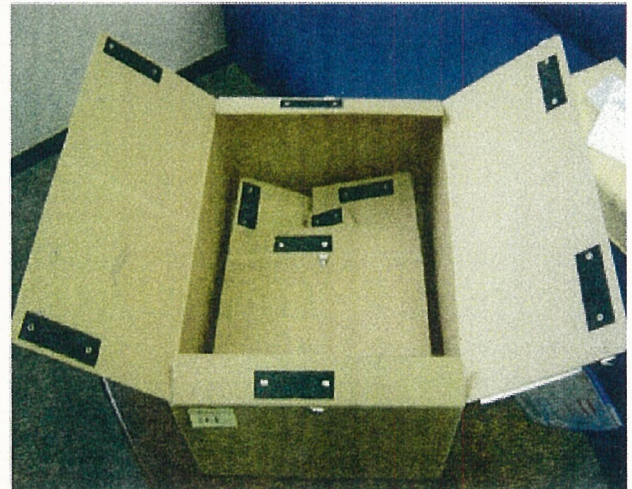
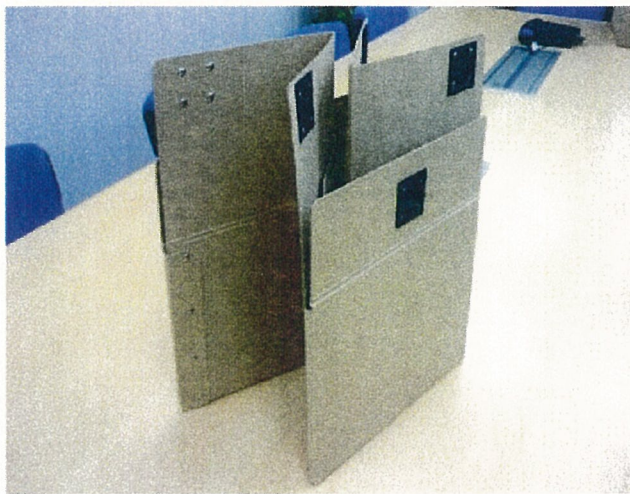
○スターウェイ株式会社 <http://www.starway.co.jp/>

2014年2月10日
港区産業振興課
メールマガジン

スターウェイ株式会社 (代表取締役 竹本直文社長)
何回も使えるエコな梱包箱『イースターパック』



2枚の透明フィルムで挟んで固定・保護できる



三つ折りにして、同じ箱の中へ収納でき、持ち運びに便利



洋服をハンガーごと運べる
「ハンガーボックス」タイプ

※箱の形は特注できる